

まえがき

ある残酷な性の記録

——アメリカにレイプされつづけてきた日本——

一九四五年八月六日、といっても、最近の若い人たちには、なんの日かよくわからないと思う。人間なら、そして日本人なら、何千年たっても絶対に忘れてはならない日だが、近ごろの教育と政治は、できるだけこの日を忘れさせよう、この日から人々の目をそむけさせよう、と必死になっているから。

これはアメリカが日本（の広島）に、人類最初の核兵器（ウラニウム爆弾）をたたきこんだ日である。最近のアメリカ側の（たとえばスタンフォード大・バーンスタイン教授）

の調査では、その朝アメリカ空軍は、広島の子供たちがおおぜい外へ遊びに出る時間を見はからい、わざわざ人口密集地の真ん中を狙ってそれをぶちこんだのだという。

その三日後には、長崎にプルトニウム爆弾が落とされた。これで広島ウラニウム爆弾との殺りく効果を比べ、より効率のいいほうをさらに数十発、日本全土にぶちこんで日本民族を全滅させようというのが、当時のアメリカ側指導層（というより、それを操っていたユダヤエリート・グループ）のはじめの計画だった。

だが、それまですでに四年間、アメリカと戦い、息もたえだえになっていた日本は、最初の二発で完全にダウンした。同月十五日、日本はアメリカをはじめとする連合国に全面降伏、悲惨な太平洋戦争（第二次大戦）は幕をとじた。

そしてこれを受けて、その月末には、早くもアメリカ占領軍の第一陣が日本本土へ乗りこんできた。いらい二カ月間に、三五万とも四十万人以上とも伝えられるアメリカ軍が日本各地に進駐した。

それは一年後、約半分に減ったが、一九五〇年、アメリカ・韓国と北朝鮮・中国とのあいだに朝鮮戦争がはじまると、前進基地日本への進駐がまたふえはじめ、五一、二年のピーク時には、在日米軍の数は七十万人近くにまでふくれあがった。

彼らはけっして全員が悪人ではなく、なかには善良な人格者もおおぜいいた。家族同伴

で進駐してきたマイホーム的な高級将校もいたし、インテリの女性将校や看護婦部隊などもいた。しかし、それらを除いた兵士の大部分は、度重なる戦争に身も心もすさんだ、狂おしくもエネルギッシュな男どもの集団だった。

だから欲望も燃えさかり、彼らの激しい性の視線は、必然的に、キャンブ（基地）の近くに住む日本女性たちに向けられた。そしてそれが限界を越えたとき、彼らの一部は彼女たちをおそい、連れ出し、おびき出して暴力で犯すことになった。

当時、彼らの給料は、敗戦にあえぐ日本人の五倍も十倍もあったので、ドルにモノを言わせて女性に言うことをきかせた兵士たちも多かった。

また日本女性のほうにも、彼ら戦勝国の兵士と親しい関係になることを誇るような女たちが現れてきた。そのため一時期、そういう女性たちとアメリカ兵がかもし出す独特の異様な風俗——当時はパンパン風俗といった——が、いくつもの基地のまわりに毒々しい原色の花を咲かせた。

この本は、そうしたレイプと腐敗と毒花のレポートである。とくに敗戦直後、アメリカ兵たちに犯された女性たちの運命の追求がメインテーマになっている。初版は前記の朝鮮戦争のさなか、一九五二年に出されたが、こんど、倒語社の和田治史氏のおすすめで復刻してもらったことになったわけである。

私としては、はじめてこの本を出してから三十年以上もたつての復刻であり、ルポライターの処女作（当時の私はまだ東北大を出たか出ないかだった）の復刻でもあり、いまあらためて読み返してみても、自分でもすさまじい感慨を禁じえない。

それは何よりもまず、その三十年以上のあいだに、なんと世の中が変わってしまったか、という感慨である。当時、原爆をたたきこまれて滅びかかっていた日本が、いまは世界一、二を争う経済大国。米軍のジープがわがもの顔に走りまわっていた国土には、かつこいハイテクの国産車がひしめきあっている。

空襲の廃虚だった街々には高層ビルが立ち並び、米軍相手の基地の女性たちも、もうみんな故人となったか老いてしまい、彼女たちの生んだ混血児も、もう三十代後半になって、過去を振りむくことの少ない、いそがしいこの国の「繁栄」の底に埋もれてしまった。

その意味では、世の中は完全に変わっている。だが、それにもかかわらず、ある意味で本質はまったく変わっていない。いまも日本はアメリカの、そしてソ連の核と宇宙兵器の脅威の下におびえ、精密残酷な絶滅兵器をそなえた軍事基地が、横須賀のカールピンソンや三沢のF16を見るまでもなく、昔より少数だがずっと大規模に、日本各地に出現するようになった。

それらの近くでの、アメリカ兵による日本女性の被害が、時おり、底流のように伝えられることもある（たとえば最近では、NHKテレビでたしか三田寛子が演じた米兵によるレイプドラマ「富士山麓」など）。しかも権力はそういう状況を許し、なれあい、日本をより強大な「不沈空母」に仕立てようと毎日狂奔している。

この意味では、世の中はぜんぜん変わっておらず、アメリカ指導層による巧妙な軍事的、文化的な占領状態（経済圧力もふくめて）がつづいてみるとみてよく、それらが新しい破壊にむかつて日本を引きずっていつていて、と考えるとよい。

だから、こういう奇妙きつな、栄えているようでじつは断崖絶壁のような、いまの異常状態になってしまった原点がどこにあったのか、見きわめるためにも、もういちど、この本に描かれた残酷時代のことを自分でも振り返ってみたいと思うのだ。

なお、この本は三十数年前、「日本の貞操」というタイトルのもとに、その続篇として、いまはない「蒼樹社」というすぐれた出版社から発行された。「貞操」とは性的な純潔またはプライドのことだが、いまは死語になって若い人は意味も実質も知らない。そのため、和田氏のアドバイスもあり、表紙のように題名を変えさせていたことをお断りする。

ただし本文中では、基地の女性たちを表わす「洋娼」（『西洋人のための娼婦』）という言葉をはじめ、三十数年前の古めかしい表現を、だいたいそのまま使った。そのほうが当

時の異様なふんいき、そのころの日本の破滅的な立場を、より生々しく伝えられるように思ったからで、それもあわせてお断わりしておきたい。

VI

一九八五年 夏

五島 勉

一九五三年に出された初版のまえがき

この報告は、一千人をこえる基地の女性たちをはじめとして、一般市民・新聞記者・公務員・学生・基地労働者・金融業者・売春業者・米国兵・国連兵など、多くの日本人・外国人からさまざまな資料の提供を受けてできあがったものである。これらのひとびとのうち、好意を持って熱心に協力してくださったひとびとに対し、わたしは心からの感謝をささげたい。またそれ以外のひとびと——知っていることを故意にかくしたり、わたしを脅迫したり、わたしに危害を加えようとしたひとびとに対しても、ともかくこれだけの資料を手に入れることができたということについて、同様に感謝すべきであろうと考える。ただしこの感謝は完全にそれだけの意味に限られ、それらのひとびとがわたしに対して抱いているであろう憎悪以上に大きい憎悪を、わたしがそれらのひとびとに対して抱いているということとはまったく別である。

わたしがこの報告のなかで果そうとしたことは、ふたつあった。第一は、米国兵および

VII

その他の国連兵が日本の女性にたいしておこなった数々の残虐的・悪魔的・非人道的犯罪をできるだけ正確にバクロすること。第二は、いままでいろいろのすぐれた著書やマス・コミュニケーションによつてすでに伝えられてきた基地の女性たちやその背後にある勢力の実態を、より適確に、より徹底的に、より多角的に、幅広く、先入観なしに見きわめることと、そして彼女たちの転落原因や心理の底にひそんでいるものをより深く掘りさげてみることであつた。国民が彼女たちを理解し、彼女たちへの対策を考える上に、これらのことが少しでも役立てばいいと思つただけけれど、わたしの能力のなさとは有形無形の圧迫のために、充分満足のいくような成果のあらわれなかつたことをほんとに残念に思う。

この報告は、敗戦以来現在までの基地の女性たちの変遷にしたがつて六つの部に分れ、各々の部はそれぞれⅠとⅡに分れている。Ⅰはそれぞれの時期におこつたいくつかの典型的な事件や基地の女性たちの生活の代表的な例などを、本人やその家族・友人・事件の目撃者などとの面接にもとづいてできるだけ正確につたえたものであり、Ⅱはそうした具体例を基礎にして、各々の時期における彼女たちについてのいろいろな問題を、資料や統計の力を借りて分析してみたものである。Ⅰはいわば事実の記録であり、Ⅱはいわば基地の女性たちの歴史であるといえよう。Ⅰに登場してくる多くの女性たちの名前は、不明なも

の・本人がとくに仮名を希望したものなどをのぞき、すべて本名を用いた。カッコ内の数字と土地名とは、その事件がおこつたときの彼女たちの年齢とその出身地とを示す。これらの事件や実例はいずれも決して特殊なものではなく、わたしが集めることのできた多くの例のなかのとくに典型的なものであるにすぎない。たとえば第一部Ⅰのいちばんはじめにてでくる沢田楊子のケースは十七の例の、またその次にでくる真野姉妹のケースは九つの例の、同じような実例のなかからえらんでぬきだしたものである。それぞれのうしろの方に（類似例十七）とか（類似例九）とか記してあるのは、それと同種の実例が、わたしの調べただけでもその数だけあつたということをあらわしている。

最後に、全体を総括する意味で、いくつかのグラフとその解説とをまとめて掲げた。

わたしがこの報告のための調査を意識的に開始したのは、一九四八年九月、つまり敗戦後三年たつたときからである。したがって、敗戦から一九四八年九月までの部分の報告は、実地調査や事件と時間的に平行した面接がおこなわれていないため、何となく印象のうすいものになり、集めた資料の数もそれからあとの部分に比べればずっと少なくなつてしまつた。これも残念なことのひとつである。

本文のなかでは、基地の女性という言葉を使わず、そのかわり「洋娼」という名で彼女たちをよぶことにした。これは基地やその周辺ではたらいっている真面目な女性たちの――

基地のなかや基地の近くに住み、働き、生活しているという意味では私たちも基地の女性なんだから、基地の女性たちという言葉に米軍相手の娼婦という意味をもたせるのは私たちへの侮辱だ——という抗議をまったく正しいと思ったからである。事実、日本全土が軍事基地化されている以上、わたしたち日本人はみんな基地の男であり基地の女なのだ。もし米軍用の娼婦だけをとくに基地の女性とよぶことにするなら、一般の日本の女性たちは基地の女ではない、つまり日本全土に十重二十重にからみついた基地の鉄鎖にしばられていないという錯覚がひきおこされることがあり、こうした錯覚こそ何よりも危険だと考えたからである。

なお、この書をまとめるにあたって、かつて外務省外局の終戦連絡委員会横浜事務局に勤務しておられた北林余志子夫人の御報告をも収録させて頂くことができた。あつく感謝する次第である。

一九五三年九月二十五日

編 者

目 次

まえがき..... I

一九五三年に出された初版のまえがき..... VII

第一部 洋娼の発生..... 一九

第一章..... 一九

- 1、沢田楊子・倉持利恵子
- 2、真野与喜子・智子・君子
- 3、山口治子
- 4、M工場の女子工員たち
- 5、江東女性軍第一中隊
- 6、横須賀の遊郭
- では 7、広島女子青年団員
- 8、大野てい子・三崎麗子・山田えい子

第二章..... 四三

敗戦——政府・銀行・売春業者の陰謀——強姦！強姦！——慰

安所——美徳の利用——性病まんえん——オフ・リミッツ